

マルコによる福音書 14:26—31

「わたしの羊飼い」

2026年7月5日(主の日)

藤沢北教会牧師 長倉基

わたしがこどものころの教会学校のさんびかにこういう曲がありました。幼いように思えますけれど、おとなも歌っていいような歌だと思います。

主イエスの羊

1. 主イエスの羊 したがうわれら
かいぬしおぼえ よりたのもう
われらはうたう われらはいのる
神の恵みを みちびきを
2. 主イエスの羊 したがうわれら
かいぬしたたえ すすみゆこう
われらはうたう われらはいのる
神の恵みを みちびきを

わたしたちは飼い主である主イエスに従う羊です。羊は羊飼いなしでは全く生きていくことができません。羊飼いに頼み、その導きに従っていくしかないのです。そしてそれは恵みの中の幸いな歩みです。

詩編第23編は歌います。「主は私の羊飼い・私は乏しいことがない。主は私を緑の野に伏させ／憩いの汀に伴われる。主は私の魂を生き返らせ／御名にふさわしく、正しい道へと導かれる」

けれども今、その羊飼いは打たれます。いなくなってしまうのです。羊はどうすればいいのでしょうか。

主イエスは弟子たちと過ぎ越しの食事をなさいました。弟子たちはわかっていなかったかもしれませんが、主イエスとの最後の夕食です。この過ぎ越しの食事の最後に歌った賛美の歌は詩編第118編です。こういう詩です。中心と思われる部分だけを読みます。

主に感謝せよ。まことに主は恵み深い。——慈しみはとこしえに

私は死なずに生きながらえ／主の業を語り伝えよう。／主は私を厳しく懲らしめたが／死に渡すことはなかった。

家を建てる者の捨てた石が隅の親石となった。／これは主の業／私たちの目には驚くべきこと。

主に感謝せよ、主は恵み深く／その慈しみはとこしえに。

主の慈しみの深さによる救いのみわざを賛美する詩です。この詩を歌ったあと、一行はオリーブ山に向かいました。おそらく、いつもオリーブ山で祈っていたのだと思います。今日は特別な祈りになることはこの時は主イエスのほか誰も知りませんが。過ぎ越し

の食事の後ですから、あたりは暗くなりはじめていました。過ぎ越しの日ですから月は出ていました。それでも木々の間は薄暗い。ご存じのようにオリーブの木はうねるように育ちますので、足元は悪く、気をつけながら歩いていたのでしょう。つまずきそうになった人もいたかもしれません。まさにそのようなところで主イエスはおっしゃいます。「あなたがたは皆、私につまずく」。「私は羊飼いを打つ。すると、羊は散らされる」とゼカリヤ書の預言が実現する、とおっしゃいました。ゼカリヤ書のこの言葉は神の裁きの預言です。偽りの指導者について行こうとした民を神が裁くためにその牧者を打つ、とおっしゃったのです。羊飼いがいなくなったら羊はちりぢりになってしまいます。

ここでは神ご自身が、羊飼いである御子であるご自身主イエスを十字架につけて殺す、ということです。キリストの十字架というのは、一方では確かに人間の罪による出来事であるのですが、同時にこの出来事は神のご計画、御心によるものでした。神ご自身が御子キリストを十字架につけられるのです。羊飼いが打たれ、羊がちりぢりになるのは悲惨なことですが、同時に聖書の預言であるということは神のご計画、神の御心である、ということです。このあと、このオリーブ山の中のゲツセマネという場所での祈りで明らかになりますが、主イエスご自身、一方で神の預言、ご計画は実現すると信じながら、一方でこの預言の厳しさを受け入れることに困難を覚えられたのです。

ところがそれに答えた一番弟子のペトロはこう言いました。「たとえ、皆がつまずいても、私はつまずきません」。つまり、ペトロはこう言ったのです。「他の皆がつまずくことはあるかもしれませんが、そうであったとしても、このわたしは違います」。「イエス様、あなたに何かあっても、わたしはつまずきません。わたしだけは迷いません。羊飼いが打たれても、わたしだけは大丈夫です」。それは、勇敢な弟子としては当然の発言であったかもしれませんが、決して羊の発言ではありませんでした。羊飼いが打たれたら、羊は行く先を見失い、迷い、散らされます。

さきほどは詩編第 23 編をみましたけれど、ほかの場所、新約聖書でも羊にたとえられるのは、神に愛されている神の民です。わたしたちのこと、教会のことです。繰り返しになりますけれど、その羊は、羊の群れは、羊飼いがいるから、羊は生きることができます。羊だけで生きて行くことはできません。ですから逆に言えば、その羊飼いが打たれたら、羊は必ず、散らされるしかないのです。そこで、主イエスがおっしゃったのは「わたしがいなくなったら、あなたがたは、つまずく」ということです。羊飼いがいなくなったら羊は散らされるしかないのと同じように、「あなたたちは必ずつまずく」とおっしゃったのです。「つまずかないように気を付けなさい、しっかりしなさい、いなくなってもつまずかないようにしなさい」とおっしゃったのではないのです。「羊飼いであるわたしが打たれたら、あなたがたは、必ずつまずく」。それは、「あなたがたは、わたしなしでは生きていけないわたしの羊なのだ」という、慈しみの言葉だったと思うのです。

ペトロの発言は、主イエスの言葉を正しく理解していませんでした。受難予告の時のペトロの答えと行動を思い起こします。「わたしは指導者たちに引き渡されて殺される」。こ

れを聞いたペトロは「そんなことは言ってはいけません」とこともあろうに主イエスを諷めたのです。主イエスは、神のご計画を受け入れないサタンの仕業とまでおっしゃいました。ここでもそうです。「あなたがたはつまずく」「いえ、わたしは大丈夫です」。勇ましい言葉ですけど、ペトロがここで言ってしまったことは、たいへん大きな意味を持ちます。「わたしはつまずきません」というのはつまり、「わたしはあなたの羊ではありません」ということだからです。これまではあなたに従い、学んできました。今後、たとえあなたがなくなったとしても、わたしは自分で歩いていきます。というのは羊の姿ではありません。

たしかに、わたしたちの信仰生活は、自分がやらなくてはならない務めがたくさんあり、自覚的に行動することを求められ、羊のように羊飼いにただついていけばいい、という生活とはほどとおいようにも思えます。ただ羊飼についていけば説教ができる、というならどれほど楽なことでしょうか。それでもなお、わたしたちが見失ってはいけない自分自身の姿とは、主イエスの羊でしかない、ということです。教会は主イエスの務めをこの地上で担っています。長老会はその会議の決定に主の御心があらわされていると信じます。教会の奉仕者も主のわざをゆだねられて行っています。それはただひたすら羊として主におゆだねしてついて行くことを意味します。十分に学んだから、自分には能力があるから、スキルが蓄積されたから、これからは羊飼から自立します、自分でやれます、などということはありえないのです。ましてや、自分は確かな信仰があるので、もう一人でやっていけます、というのは羊飼いがいないのに生きていける羊、というありえない存在になってしまうでしょう。

主イエスはペトロのこの答えに対して、はっきりとおっしゃいました。「今夜、鶏が二度鳴く前に、あなたは三度、私を知らないと言うだろう」「たとえ、ご一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどとは決して申しません」。けれども、実際主イエスがおっしゃったとおりのことが起こります。羊は散らされるのです。この箇所はこの後出てくるのですが、一つだけここで触れた方がいいと思うことがあります。それは、ペトロが「わたしはつまずきません」、「知らないなどとは決して申しません」と勇ましく答えたことと、実際に「あんな人のことなど知らない」と主イエスとのかかわりを否定したことは、一見正反対に見えますけれど、同じことだ、ということです。「わたしは、ひとりでも大丈夫です。あなたの羊ではありません」。「あんな男など知らない。わたしはあの男の羊などではない」。「主イエスの羊ではない」、それが弟子の犯す罪、主イエスを一人で十字架に向かわせてしまった罪の言葉です。「わたしは大丈夫です。」という、この世では歓迎される言葉が、主に対しては十字架への言葉となってしまう。これは衝撃的なことだと思います。この前の2回ほどはユダの裏切りが話題になりました。けれども、ユダのように主イエスを裏切ることがあるだろうか、ユダの心のうちがわかるようなことが記されていないこともあって、自分はユダの気持ちがわかる、ユダの罪が自分の罪だ、とはなかなか言えないと思います。けれども、ペトロの言動は、本当に身につまされるものがあり

ます。「わたしはやります。大丈夫です。ほかの人がどうであろうと、わたしだけは大丈夫です」。もちろん、勇ましく言うておいて、結局できない、というペトロの姿もわたしたちの姿です。

「羊飼いを打つ、羊は散らされる」。飼い主がいなければ散らされるしかないわたしたちです。どうすればいいのでしょうか。

「羊飼いが打たれたら羊たちは散らされる」これは事実を述べているのであって、「あなたたちはわたしの羊である」という慈しみの言葉でもある、と言いました。ですから、ペトロがいくら強がっても、あるいは大失態を犯しても、ペトロが主イエスの羊であるという事実は変わりません。「お前はもうわたしの羊ではない」などと主イエスは一度もおっしゃいません。わたしたちが主イエスの羊である事実が揺らぐことは決してないのです。

そのことを主イエスはすでにはっきりとおっしゃっていました。ペトロはいつも大事なことを聞き逃します。理解できないので抜けてしまうのかもしれませんが。これも私たちの姿かもしれません。受難予告の時は、「わたしは指導者たちに殺される」とおっしゃった後、主イエスは「しかしそのあと復活する」とおっしゃったのです。ペトロの反応を見ると、このことには一切触れていないことがわかります。今回も主イエスは「散らされる。つまり」とおっしゃった後「しかし、私は復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く」とおっしゃっています。ペトロはやはりここには触れていません。主イエスがガリラヤに行かれるというのは、弟子たちの先に立って、導いて行かれる、という意味です。復活なさったときは確かに先にガリラヤに行かれて、弟子たちはあとから行くのですが、単にその一回のことをおっしゃっているのではありません。ガリラヤとは、まさにペトロ、そして兄弟のアンデレ、またヨハネ、ヤコブを弟子にしたところです。この4人が最初の弟子であり、この4人はすべてを捨てて主イエスにしたがってきたのです。最初に羊飼いの声を聞き、羊として従ったのがガリラヤだったのです。つまり、散らされた弟子たちの群れは、もう一度あのガリラヤから再出発します。羊飼いにひたすらついていく羊として。

先週の水曜日、病床洗礼を行いました。長く家族からの伝道、信仰への勧めを聞きつつも、受け入れられずにいた人が、ついに主イエスを受け入れた時でした。通常の洗礼式の場合は事前に予定をたてて長老会の試問を行います。信仰について中心的なことを、しかしさまざまに問い、さまざまに答えてもらいます。時間もかかります。病床洗礼はそうは行きません。病室で時間も限られ、ご本人も言葉を尽くして語ることはできないのです。正直なところ、洗礼式の準備を教会で始めてから病室に向かう時まで「はっきりと信仰を告白できなかったらどうしよう」と内心不安に思っていました。不信仰と言わざるをえないかもしれません。そして、病室についてすぐにこう問いました。「ここまで、少ない回数ですが学びをしました。主の祈りを祈り、使徒信条を唱えました。今、主イエスを救い主として信じておられますか」。そうすると今まで聞いたことのないほどの大きな声で「信じます」とおっしゃったのです。そして洗礼を授けることができました。誓約もはっきり

と「信じます」「約束します」とおっしゃいました。ベッドで少しでも上半身を起こすような姿勢でおこなった洗礼でした。座ったり、もちろん立ち上がることもできないのです。それでもなお聖書と説教にうなずき、お祈りのときは指を組もうとし、主の祈りと使徒信条も小さい声ながらはっきりと祈り、唱えました。この後も、回復を祈っていますけれど、入院している間は、同じような姿勢で家族といっしょに聖書を読み、お祈りをする生活が始まります。主イエスがこの方をお招きになった。「わたしはあなたの羊飼い」ここに一匹の羊が生まれました。

わたしたちの羊飼い、主イエスは復活なさいました。もはや打たれることはなく、わたしたちもちりぢりに散ることはありません。主イエスはわたしたちの羊飼いであり続けてくださいます。飼い主をいつも見上げてより頼み、すぐそばにいてくださる羊飼いに従ってこれからも歩みましょう。